

歴史に学ぶ

大阪経済大学特命教授・
経済評論家

岡田 晃

第五十五回

水戸黄門の諸国漫遊は創作！それでも名君だったワケ

水戸黄門と言えば時代劇の定番だった。助さん・格さんを伴って全国各地をめぐり、毎回旅先で庶民を苦しめる悪代官や悪徳商人たちを懲らしめるお決まりの展開。テレビでは長年にわたって放送され、高視聴率が続いていた。

だが実在の黄門様は江戸との往復以外は藩外への旅をほとんどしたことがない。日光東照宮への数回の参拝のほか、房総経由で鎌倉に出かけたことが一回あるだけだ。ではなぜ、「諸国を漫遊した庶民の味方」という話になったのだろうか。

ある出生の「秘密」 少年時代は不良だった

黄門様こと徳川光圀は、水戸藩の初代藩主・徳川頼房の三男として一六二八年に水戸城下で生まれた。頼房は徳川家康の末子・十一男なので、光圀は家康の孫にあたる。

ところがその出生にはある「秘密」があった。頼房の側室・久子が光圀を身ごもった時、頼房は

「墮胎させよ」と側近の三木之次^{ゆきぎ}に命じたが、不憫に思った三木は頼房に内緒で自分の屋敷で出産させたのだった。光圀は六歳の時に頼房の跡継ぎとして認められた。

だが実は、光圀には六歳年上の同母兄・頼重^{よりしげ}がいたのだ。この兄も、久子が懐妊した時に墮胎を命じられたものの三木夫妻が引き取って密かに出産させていた。本来なら頼重が水戸藩主になるべき立場だったはずだ。だが頼重は常陸下館藩五万石、後に讃岐高松藩十二万石を与えられただけ。一方、光圀は御三家・水戸藩二十八万石の藩主となり、兄よりはるかに格上に立つことになる。

頼房はなぜ順番を逆にして弟の光圀を跡継ぎにしたのか、そもそもなぜ二人の子を墮胎させようとしたのかなど、よくわからない点が多いが、光圀自身は兄を差し置いて自分が跡継ぎになったことを大変気にかけていたようだ。兄に申し訳ないという気持ちで心の負担になったのか、父への反発からか、少年時代の光圀は遊び仲間と一緒に派手

な格好をして街で乱暴を働くなど非行を繰り返した。要するにグレたのだ。

兄の子に跡継ぎを譲る 自らを律し仁政^{にぎま}を敷く

だが十八歳の頃に読んだ中国の歴史書『史記』の中に、殷の時代に王位を譲り合った兄弟の逸話があり、感銘を受けた。これをきっかけに心を入れ替えた光圀は、儒教など勉強に励むようになり、将来の藩主としての自覚を高めていった。

そして自分が藩主になったら、水戸藩は兄の子に譲ろうと内心決めたという。その布石としてだろう、七年後に侍女との間に長男・頼常が生まれると高松に送り、頼重に預けている。

やがて三十四歳になった一六六一年、父・頼房が亡くなり、水戸藩主となるのだが、この時、光圀は二つの重要な決定を下した。

まず、殉死の禁止である。頼房が亡くなると何人かの重臣が殉死しようとした。当時はまだ、殉

死が最高の忠義とする風潮があったのだ。だが光圀は、殉死しようとしていた重臣たちの各邸宅に出向いて説得し、思いとどまらせた。

これは、同時期の会津藩などと並んで殉死禁止の先駆けとなった。殉死は主君個人への忠義を表すものだったが、幕藩体制が定着したその頃には主君個人より「お家」への忠義が重要になっていた。光圀はそうした時代の変化をいち早くとらえていたのだ。その二年後に幕府は殉死の禁止を通達している。

もう一つの重要決定は、跡継ぎの交換だ。

光圀は兄・頼重の長男・綱方と次男・綱條を自分の養子にもらい水戸藩の跡継ぎにすることにした。十八歳の時の決心を実行に移したのだ。そして後に綱條に水戸藩を継がせている（綱方は早世）。一方、高松で育った光圀の長男・頼常は、

正式に頼重の養子となり高松藩の世子となった。

息子の代で本来のあるべき姿に戻したというわけだ。普通なら、我が子に跡を継がせたいと思うところだろうが、そうはしなかったのだ。

このように自らを律しリーダーとしてあるべき姿を貫くという姿勢は生涯変わらなかった。

藩主に就任した光圀は藩内巡視を頻繁に行ったり、巡視のたびに日頃から善行のある農民を表彰したり、災害を受けた地域では農民を激励した。

水戸藩は財政難に陥っていたため、自ら粗末な衣服を着るなどして質素節約を実践したが、そんな中でも、日常の飲料水に苦しむ城下の住民のために大規模な水道敷設工事を実施した。

これらの政策は、儒教に基づく仁政をめざしたものだ。家臣の意見にもよく耳を傾けた。その一方で、身分の高い家臣の過ちや失策には厳しい態度で臨み、重い処分を下すことも少なくなかった。

光圀のこのような「下にやさしく上に厳しい」といった姿勢が、名君と評価される大きな要因となったと思われる。庶民からの人気という点では、五代将軍・綱吉の後継ぎ問題や生類憐みの令をめぐる綱吉を批判したことも影響している。

時代劇では、光圀が犬の毛皮を綱吉に贈ったという話がよく出てくるが、これはどうも後世の創作らしい。だが光圀は江戸城内の会議で「生類憐みの令は人を憐れむ心がもとになっている。だが、人は過ちがあれば処罰を受ける。咎のある生類をどうして罰しないのか」と、行き過ぎた取り締まりを公然と批判している。

名君になった三つのワケ 激動の時代に必要な歴史的視点

こうしてみてくると、光圀が名君になったワケがよくわかる。そこからは、現代の企業トップや幹部にとって必要な要素を学びとることができる。

第一は、何と言つても自らを律してリーダーとしてあるべき姿を示したことだ。それによって部下から信頼を得ることができた。今日のコーポレートガバナンスにも通じる点だ。

第二は、殉死禁止のように、時代の変化を見抜く力だ。何が必要か、不要になったかなどを見分け、他者に先駆けて行動することが重要である。

第三は、藩内巡視、生類憐みの令への批判などにみられるように、民情把握に努めていたことだ。これは現代で言えば、市場の实情やニーズ、あるいは社内の現場の实情を把握し、それに対応していくことだ。

これらの根底には、光圀の歴史を見る眼がもとになっていた。生涯を通して『大日本史』の編纂に力を注いだのは、その表れだ。過去の歴史を振り返ることによって、将来への指針にしようとの狙いだったのだ。このような歴史的視点は、激変する今の時代にこそ必要である。

岡田晃（おかだ あきら）

一九七一年、慶應義塾大学経済学部卒業後、日本経済新聞社入社。編集委員を経て、テレビ東京出向。「ワールドビジネスサテライト（WBS）」マーケットキャスター、同プロデューサー、NY支局長、テレビ東京アメリカ社長、理事・解説委員長。二〇〇六年から大阪経済大学客員教授、同特別招聘教授を経て、二〇二五年に同特命教授。

